

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

ISSN 0389-1984

163 東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F
Phone: 03-344-1701~3
Fax: 03-342-6911

October 1990

No.54

2	1990年度研究助成の選考を終えて
3~5	1990年度研究助成対象一覧
6~7	1990年度市民活動助成（第1期）の選考を終えて、他
7	1990年度国際助成の選考を終えて
8~11	1990年度国際助成対象一覧
11~13	1990年度「隣プロ」助成対象一覧、他
14~16	新刊紹介、他

第57回理事会開催

助成対象に214件を決定

去る10月12日（金）、第57回理事会が都内にて開催された。今回は1990（平成2）年度助成対象の審議と決定が中心となり、その結果、研究助成、市民活動助成および国際助成など、合計214件、総額にして4億3,766万円の助成を決定した。

おもな内容は以下のとおり。

■研究助成は57件、2億250万円

助成対象の内訳は、個人奨励（第I種）研究が25件、試行・準備（第II種）研究が18件、総合（第III種）研究が14件となったが、申請総数742件から割り出した採択率は7.7%と、昨年度の8.3%よりもさらに厳しいものとなった。対象となった研究課題は、例年同様バラエティに富んでいるが、内容を概観すると「高度技術社会への対応」と「多文化社会への対応」という2つの重点課題に沿ったものが多くなっており、その浸透度の広まりがうかがえる。（P.2~5参照）

■市民活動助成は第1期分として10件、1,900万円

本年度より助成内容を新たにした当助成については、第1期の公募で49件の申請があり、このうち10件が助成の対象となった。記録の作成や出版、フォーラムやシンポの開催、データベースの構築作業、調査・研究と、その内容も多岐にわたるものとなった。（P.6~7参照）なお、第2期分の公募は、この11月30日まで行っている。詳細は財団事務局まで。（P.16参照）

■国際助成は99件、1億2,000万円

東南アジア諸国などにおける各地の「固有文化の保存と振興」に関する（現地の人々による）研究や事業に重点をおいた当助成では、99件がその対象となった。

なお、この内31件（合計980万円）については「インドネシア若手研究者奨励研究助成」の助成対象。（P.7~11参照）

■「隣人をよく知ろう」プログラムは28件、6,238万円

日本と発展途上国、および発展途上国相互間の理解促進を目的としたこのプログラムでは、翻訳・出版の促進のための助成を行っている。昨年度までは、その対象地域を東南アジアのみに限っていたが、本年度からは南アジアも含むこととなった。

その内訳は、「日本向け」が11件、「東南アジア向け・南アジア向け」12件、「東南アジア・南アジア相互間」が5件となっている。（P.11~13参照）

■その他

「計画助成」および「成果発表助成」の対象として合計20件、3,378万円が決定した。

第16回助成金贈呈式

1990年度の助成金贈呈式を10月17日（水）午後1時30分より東京・新宿区内のホテルにて行った。助成の対象となられた方々や財団関係者など出席者多数のもと開会となった。

豊田英二理事長の挨拶、各選考委員長による経過報告の後、理事長より代表者に助成金贈呈書が手渡された。また、来賓の総理府・内閣総理大臣官房管理室長よりご挨拶をいただき、3時に閉会となった。

1990年度 研究助成の選考を終えて

研究助成選考委員長 飯島宗一

◎選考の経過

本年度の研究助成も昨年同様、「新しい人間社会の探究」を基本テーマとし、その下に「高度技術社会への対応」と「多文化社会への対応」という2つの重点課題を掲げて、4月から5月末の2ヶ月にわたって公募が行われた。若手研究者の冒険的な試みを応援する個人奨励（第Ⅰ種）研究、学際的、国際的、職際的な研究展開を目指して基礎固めを行うための試行・準備（第Ⅱ種）研究、試行準備を踏まえた本格的展開のための総合（第Ⅲ種）研究という3つの種別も従来通りである。

昨年度と異なる点は、第Ⅱ種研究の上限金額を従来の300万円から400万円に増額したことである。これは、特に国際共同研究の場合300万円ではやや窮屈かもしれないと配慮したからだが、その反面、2億円という予算枠はこれまでと変わらないわけだから採択件数の面でいささか枠がせびまったことになる。

また、今回はたまたま、第Ⅱ・Ⅲ種の選考を担当する10人の選考委員のうち7人が、また第Ⅰ種の選考を担当する6人の専門委員のうち4人がそれぞれ新任ということで、委員会としての個性も昨年度とは異なったものとなった。選考作業の主要な部分は6月末から8月末の2カ月間に集中した。

第Ⅰ種研究の場合は、専門委員で構成する分科会において第一次選考を行い、本委員会ではその結果を検討し承認する形をとった。第Ⅱ種研究の場合は本委員会ですべての二次にわたる選考を経て候補を決定した。また第Ⅲ種研究の場合は、第一次選考を省略するかわりに、これまでの報告書等を各委員が詳細に検討するなど、これまでの経過も加味して第二次選考委員会で審議し決定した。いずれの委員会においても、各案件を原則3人の委員が評価した結果に基づきながら、しかも単なる評価得点の順位だけではなく、一人一人の評価の意味を十分論議した上で採否を判断するよう努力した。この間、各委員が個々の案件の評価にかけた時間や、選考の場で議論に集中したエネルギーは並々ならぬものがあったことを申し添えたい。

◎選考結果について

このような経過を経て、本年度採択された課題は57件で総額2億250万円であった。これは申請総数742件に対し、7.7%の採択率が昨年度の8.3%よりさらに厳しくなった。本年度の文部省の科学研究費補助金の全体での採択率が31.2%であったことと対比すると相当に狭き門であると言ふべきであろう。

採択分について種別の内訳をみると、第Ⅰ種研究が25件で44

50万円、第Ⅱ種研究が18件で5780万円、第Ⅲ種研究が14件で1億200万円である。

トヨタ財団の研究助成の特徴のひとつに、申請者の国籍や資格等を一切問わないということがあり、当然、外国人や海外在住の日本人など、一般に研究費を得にくい立場の人々からの申請も多い。採択結果もこれを反映して、57件の採択のうち17件が外国人や海外在住の日本人からのものであった。外国人の国籍も、中国5件、アメリカ、イスラエル、インドネシア、韓国、ブラジル各1件と多彩である。

また、採択の中で女性の占める比率が高いのもひとつの特徴であり、57件中15件は代表者が女性であった。特に第Ⅰ種研究の25件中女性は9件を占めた。

◎採択テーマについて

採択テーマについては例年同様、非常にバラエティに富んだものとなった。特に第Ⅰ種研究では、テーマの社会性もさることながら、研究者個人の独創的な課題探究を応援しようという配慮もあり、No.1、8、11、24、25など特殊なテーマを深く掘り下げるような研究が採択されている。また、No.20、22はともに研究者自身が障害を持つ立場で研究に取り組むもので新しい可能性を開くことに期待したい。

第Ⅱ種、第Ⅲ種の共同研究においては、国際共同が32件中26件と多数を占め、またそれらの多くは外国を主なフィールドとしている。さらに共同研究の基本に国際協力の姿勢があることも財団の助成対象としてみれば必然的なことかもしれない。No.33、35、38、41、42、No.44、46、47、50、51などいずれも学術協力的性格を持つものであるが、日本側と相手側研究者との対等な共同関係が成立していることが重要である。これらに比べ、日本側の学術的関心のみが先行したような国際共同研究は採択にはなりにくい。

第Ⅲ種は採択件数を絞り切れず、多くのもので申請額を相当にカットせざるを得なかった。しかし、ある程度の大きなプロジェクトに対応していくことも必要であろう。本年度で結果的に最大金額の対象となったのはNo.48であるが、これは地球規模での環境問題に対する新たな研究分野を開拓するものとして進展に期待したい。

以上、ごく簡単に本年度研究助成の選考概要を紹介した。

助成活動というものは毎年の繰り返しのように見えるが、ひとつひとつの採択課題は、申請者からの真摯な呼びかけと、それに共感した選考委員とのまったく新しい出会いの結果として生まれてくるものである。民間財団としては、助成を固定した制度と考えるのではなく、日々あらたな行為としてよりよいあり方を模索することが大切であろう。

1990年度 研究助成対象一覧

個人奨励(第1種)研究 (25件: 4,450万円)

注 { 研究題目末尾の継2(3)は、継続2(3)回目を示す。
助成金額下の()は、助成期間を示す。無記入は1年間。

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (万円)
1	アサンテ族における国家形成と多民族支配過程に関する民族学的研究 -王都クマシ・ゾンゴ(Kumasi Zongo)の権力的・象徴的空間構造-	阿久津 昌三	信州大学 教育学部	180
2	ソ連の農業生産に及ぼす気象要素のインパクト度合いとその予測法確立のための一研究 -地球環境問題解明に関連して-	森 広道	気象庁 大阪管区気象台 技術部 予報課	160
3	熱帯アジア山地植生-人間系の研究: マレーシア, サバ州における熱帯山地林の現状分析と保護管理(継2)	北山 兼弘	ハワイ大学 大学院 植物学科	200
4	東南アジアにおける日本人コミュニティの研究 -ジャカルタに見る日本人の生き方-	白石 さや	コーネル大学 モダン・インドネシアプロジェクト	150
5	エスニック・コミュニティから見たオーストラリアの多元文化主義に関する研究 -アジア系移民の政治参加と中国系コミュニティの活動調査を中心に-	増田 あゆみ	神戸大学 大学院 法学研究科	180
6	東西文化の衝突と青少年の犯罪心理への影響に関する比較研究 -80年代の中国と50年代の日本の青少年犯罪のピークを中心に-	劉 亜	東京医科歯科大学 難治疾患研究所	150
7	ラテン・アメリカにおける文化遺産と歴史観の様態と変容に関する研究	関 雄二	東京大学 総合研究資料館	170
8	西チベットの仏教遺跡と仏教美術の総合調査	田中 公明	(財)東方研究会	180
9	伝承組織と地域の社会・経済構造との相互規定関係に関する比較研究 -南島諸島・東海地方・東北を例に-	山本 宏子	調布学園女子短期大学	170
10	ブラジルにおける日本宗教に関する研究 -アイデンティティと社会・文化的変化を巡って-	ホナン・アルベス・ベレイラ	東京大学 大学院 総合文化研究科	180
11	興行師リズレーによって行なわれた1860年代末の日本軽業海外公演が欧米演劇に与えた影響とその意義に関する研究	三原 文	関西学院大学	180
12	土地利用改変による水循環変化に関する研究 -奈良盆地における人間活動と水環境との関係について-	谷口 真人	奈良教育大学 教育学部	180
13	在宅の痴呆性老人とその家族の相互作用の経時的変化に関する研究 -痴呆性老人に対する家族の効果的な関わりの技術の開発をめざして-	太田 喜久子	聖路加看護大学 大学院	180
14	占領期日本の社会保障の形成過程に関する研究	菅沼 隆	東京大学 社会科学研究所	190
15	在日ユダヤ人における民族的アイデンティティの伝達・継承に関する文化人類学的研究 -家族のネットワークを中心として-	佐藤 泉	東洋女子短期大学 欧米文化学科	170
16	経済発展による地域社会の変容に関する日本と中国の比較実証研究 -農村地域を中心として-	章 政	東京農業大学 大学院	170
17	サンパウロのファベラ(貧民街)におけるエイズ意識・行動・知識調査	小貫 大輔	東京大学 大学院 教育学研究科	200
18	分離運動に先行するフィリピン・ムスリムの政治参加運動に関する研究 -イスラーム団体の興隆とその役割を中心に-	川島 緑	東京大学 大学院 総合文化研究科	150
19	スウェーデンの移民政策の成果と問題点に関する調査研究 -異文化間の摩擦に対する社会心理学的アプローチ-	児玉 克哉	三重大学 人文学部	180
20	視覚障害者の職場に於ける支援システムに関する研究 -英米の制度・事例を中心として-	指田 忠司	平和学院衛生福祉専門学校	200
21	「任那」問題を通してみた日朝「非」友好再生の構造分析 -乖離する日朝歴史学界の接近をめざして-	田中 俊明	堺女子短期大学	180

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.54

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (万円)
22	高度技術社会の進展と外傷性重度四肢まひ者の生産活動参加過程に関する日米比較研究およびハイテクの活用による新しい可能性に関する研究	清家 一雄	重度四肢まひ者の就労問題研究会	200
23	日米企業従業員の職業性ストレスと健康に関する研究 - 2つの文化におけるKarasekモデルの検討を中心として-	川上 憲人	テキサス大学 公衆衛生学部	180
24	スリランカの混血民族集団, ダッチ・バーガーズのエスニシティの変遷に関する研究 - 植民地支配から民族国家の時代への移行に伴う適応ストラテジーとの関連において-	藤沼 瑞枝	ワシントン大学シアトル校 大学院 人類学部	180
25	ヒンドゥー寺院建築技術の伝統と継承に関する研究 - インド国オリッサ州の石大工家元に伝わる伝統技術の実態調査-	伊藤 達也	西ベンガル州立カルカッタ大学 大学院	190

予備的(第Ⅱ種)研究 (18件:5,780万円)

26	先端基礎科学分野における国際融合 - 大望遠鏡ハワイ設置計画をめぐる文化・制度上の諸課題-	小平 桂一 他7名	国立天文台	280
27	東西ドイツの再統合とそのEC統合および東欧変革に対するインパクト	住谷 一彦 他12名	帝京大学 文学部	400
28	一元的社会経済体制の転換と中・東欧の民族問題 - 満族文化の基礎的資料に関する緊急調査研究 - とくに民俗学と歴史学の領域において-	愛新覺羅顯瑞 他12名	満学研究会	350
29	満洲族の言語と文化に関する国際共同研究 - 満日漢辞典の編纂を目標として-	河内 良弘 他5名	京都大学 文学部	300
30	台湾高山族諸部族における民族文化と健康に関する国際共同研究 - 食文化の変容と口腔の健康を手がかりとして-	井上 直彦 他13名	東京大学 医学部	330
31	海外における日本文化の受容に関する実証的研究 - タイとその周辺地域の事例-	村嶋 英治 他10名	アジア経済研究所	350
32	ヤシ科植物の多様な生産物に見る日本とアジア・太平洋 - その生産・流通・消費の現場から-	鶴見 良行 他11名	龍谷大学 経済学部	350
33	日本とネパールの薬物およびアルコール乱用に関する研究 - 特に若年層における乱用の疫学的調査-	加藤 伸勝 他8名	東京都精神医学総合研究所	300
34	都市体験を活用したまちづくり主体の育成と都市づくり方策に関する研究 - 街遊び、探検隊活動、まちづくりイベントを活用した新しい都市計画論に向けて-	吉川 仁 他11名	(株)防災都市計画研究所	150
35	焼畑から常畑への移行過程における耕地生態学的研究 - モンスーン熱帯環境に調和した耕地持続型農法の開発を目指して-	服部 共生 他4名	京都府立大学 農学部	350
36	ブラジルからの日系出稼ぎ労働者の実態と日本社会の対応 - 送出国ブラジルと受入国日本での共同研究をとおして-	渡辺 雅子 他6名	明治学院大学 社会学部	350
37	子どもの権利の国際的展開とわが国社会の対応 - 子どもの権利条約とその具体化に関する職制的・総合的研究-	石川 稔 他10名	上智大学 法学部	360
38	インドネシア・タイにおける精神遅滞者への地域生活援助に関する実践的研究	岩崎 正子 他20名	桃花塾 成人部	350
39	第二次大戦中の日印関係およびその影響 - 南アジアの国民国家形成と日本-	長崎 暢子 他7名	東京大学 教養学部	280
40	日本における性別役割分担の史的的研究 - 男性主導社会内での女性文化のあり方-	脇田 晴子 他18名	大阪外国語大学	380
41	熱帯林業の健康リスクに関する実証的研究 - 機械化に伴なう生活と健康の変容-	二塚 信 他10名	熊本大学 医学部	300
42	ロントラ調査に基づく南スラウェシの伝承医薬の研究	山本 出 他11名	東京農業大学	270

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.54

No	研究 題 目	研究 者 名	研究 者 所 属	助成金額 (万円)
43	南太平洋島嶼国の自立化と非核化の展望に関する予備的研究(Ⅱ) -非核化をめぐる民衆の内発的なトランスナショナル・ネットワークの動態分析を中心にして-(継2)	佐藤 幸男 他10名	広島大学 平和科学研究センター	330
総合(第Ⅲ種)研究 [14件:10,020万円]				
44	ボゴール博物館と連帯して、インドネシアの自然史研究を推進する計画:土壌生物によるウォレス線とウェーバー線の再検討(継3)	吉井 良三 他5名	京都大学	350
45	スマトラ沿岸低湿地の生態系と土地利用の変化 -地域の生態系と住民社会の現状に根ざした新しい地域発展の在り方を目指して-(継2)	スピアンディ・サビハム 他14名	ボゴール農科大学 農学部	600 2年
46	中国の乾燥地における砂漠化防止に関する実証的研究 -毛烏素沙漠におけるモデル牧農場建設に向けて-(継3)	姚 洪 林 他15名	内モン古林業科学研究院 毛烏素沙地研究センター	450
47	上総掘りの学際的研究 -等身大の国際技術協力の実践をめざして-(継2)	諸岡 青人 他12名	難民を助ける会 上総塾	750 2年
48	長崎原爆残留放射能(Pu-239+240, Cs-137)をトレーサーとして利用した長寿命有害物質と自然界との相互作用に関する調査研究 -局地汚染と地球規模汚染-(継3)	工藤 章 他5名	カナダ生化学・技術研究所	1,700 2年
49	日本文化における「外なる他者および内なる他者」像の形成と現状(継3)	ヤコブ・ラズ 他7名	ヘブライ大学	740
50	ベトナムの環境における化学物質の挙動と人体の影響に関する国際共同研究(継2)	原田 正純 他8名	熊本大学 医学部	770
51	中国における水棲哺乳類の棲息環境汚染に関する生態学的、環境化学的研究 -ヨウスコウカワイルカの保護を目指して-(継2)	周 開 亜 他6名	南京師範大学	1,000 2年
52	近代日本における「経世済民」思想・運動の展開 -ハワイ日系社会および韓国の事例との比較をつうじて-(継2)	テツオ・ナジタ 他1名	シカゴ大学 歴史学部	450
53	中国帰国者の適応過程に関するプロスペクティブ・スタディ(継2)	江畑 敬介 他20名	都立松沢病院 精神科	1,000 2年
54	アジアに於ける近代建築に関する基礎研究 -現存遺産調査③ - 中国・台湾・韓国・マカオ・香港(継3)	藤森 照信 他36名	東京大学 生産技術研究所	970
55	韓国における失語症患者言語機能の診断・評価・治療法の開発研究 -韓国版失語症鑑別診断検査(試案Ⅰ)の標準化および日本語の失語症状との比較-(継3)	朴 恵淑 他4名	延世大学医科大学付属病院	140
56	下北半島出身者の職業的社会的化過程についての追跡調査研究 -成人期発達研究の総合化をめざして-(継2)	細江 達郎 他6名	岩手大学 人文社会科学部	500 2年
57	占領下における各種情報メディアの書誌調整とその総合的実証研究 -特にプランゲ文庫(米国)を中心として-(継3)	奥泉 栄三郎 他9名	シカゴ大学 東アジア図書館 閲覧部	600 2年

研究助成合計

57件

20,250

1990年度 市民活動助成（第1期）の選考を終えて

市民活動助成選考委員長 栗原 彬

●本年度の助成について

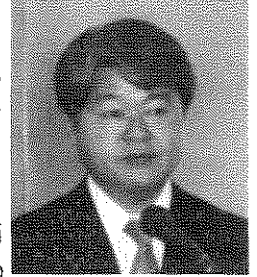
本年度の市民活動助成については、昨年度まで行っていた「活動記録の作成」（公募型）、それによって作成された「記録の出版」（非公募型）、および「活動交流促進プロジェクト」（非公募・計画型）に対する助成の経験を踏まえ、これらを統合・拡充した内容とした。すなわち、今後の社会においてその役割が益々重要なものとなるであろう市民活動全体の強化・促進に役立つ種々のプロジェクトへの助成を行おうというもので、特に活動交流促進プロジェクトを一般公募にしたことがこれまでと大きく異なる点である。

●申請全体の特徴

その公募も、本年度からは年に1回実施することとし、第1期はこの4月1日より6月20日（第2期はこの10月1日から11月30日）まで行った。その結果、49件の応募があり、これらの内訳を概観すると次の通りである。まず、計画実施上の中心となる団体の所在地については、やはり関東（22件）と関西（15件）に集中しており、中でも東京16件、大阪8件が目立った。また、おもな活動分野については、助成の主旨を反映してか、複数の分野に及ぶ「複合型」が13件と多く、「環境・街づくり」関係が8件、「自然保護・エコロジー」5件、「障害者福祉」7件が目についたものの、このところ比較的多かった「食べもの」や「（有機）農業」に関わる団体からの応募が1件もなかったことは意外だった。

これら応募された申請からみると、現在の市民活動が重大な転換期を迎えていることを感ずる。この変化は、もとより行政と企業の「環境開発」、ネオ・コーポラティズム、情報ネットワーク化などへの対応という側面をもつが、同時に、市民活動

が、自前の構想と政策およびネットワークをもち、今後の社会を“草の根”レベルから見つめ直し、築き上げていく方向への萌芽をも内包しているものと考えられる。



●選考について

さて、申請に関する選考委員の評価については、大別して2つの観点①計画実施上の中心となる団体の活動内容、および、②計画の内容から行うこととなった。その結果に基づき、選考委員会では、活動内容の創造性や広がり、計画の具体性やその実現性、および実施された計画が他の団体に与えるインパクトなど、種々の点から個々の申請について熱のこもった議論が長時間なされた。そして、多くの委員の評価を得られた別紙の10件のプロジェクトが結果として助成候補となったわけである。

これらの内訳は、第1に、永年続けてきた活動を記録し、振り返ることにより、今後の新しい方向性を模索しようとするもの。第2に、活動に関わる人間関係の現状を根本的に問い直しより良い関係を再構築しようとするもの。第3に、リーダーやコーディネーターの養成、情報のデータ・ベースやマニュアルの作成と提供など、市民活動の基盤ネットワークづくりを志向するもの、に分類されるが、いずれも、何等かの形で十分な活動体験の蓄積を踏まえ、事前によく練られた広がりのあるプロジェクトばかりである。

一方、他の39件については、上記の点の幾つかで強い疑問が出されたか、または、そうでなくても全体的に高い評価の得られなかったことが主な理由で、残念ながら採択には至らなかった。なお、これらのプロジェクトのうちの数件については、評価する向きもあったものの、採択とするには今一步だったため計画を練り直した上で再度申請されることを期待する意見が出されたことを付言しておきたい。

1990年度 市民活動助成対象一覧

テーマ末尾の継2(3)は、継続2(3)回目を示す。

	テ	マ	代	表	者	名	代	表	者	所	属	助	成	金	額
1	ミニコミ紙・誌の実態調査及び収集とデータベースの作成（継3）		丸山	尚	他11名	住民図書館						220			
2	「土呂久をめぐる運動」に関する記録の作成		上野	登	他17名	土呂久・松尾等鉾書の被害者を守る会						200			
3	「ネットワーキング・フォーラム in 関西 一地域で生きる場の再構築をー」の開催		田中	義信	他14名	大阪YMCA						200			
4	「障害者の生活環境改善の活動」に関する記録の出版		太宰	博邦	他15名	国際障害者年日本推進協議会						100			
5	「アジア学院20年の歩み」に関する記録の作成		野崎	威三男	他9名	学校法人 アジア学院						200			

	テ ー マ	代 表 者 名	代 表 者 所 属	助 成 金 額 (万 円)
6	市民活動のコーディネートに関する調査・研究 - ボランティア・コーディネーターを中心に-	筒井 のり子 他10名	市民活動のコーディネートに関する研究会	180
7	ネットワークをつなぐニュースレター『N W e r 9 0』の発行(継2)	村上 良雄 他6名	ネットワークング社会研究所	220
8	「全国NGOの集い - 1990年代の地球社会におけるNGO間の新しいネットワークを求めて-」の開催	高見 敏弘 他10名	「全国NGOの集い」実行委員会	200
9	在日韓国・朝鮮人等の諸問題に関わる市民活動のミニコミの収集・整理とその分析	佐藤 信行 他9名	在日韓国人問題研究所	180
10	「シンポジウム：私達がつくる医療の新しい時代-自律へのネットワークを求めて-」の開催	白井 泰子 他14名	自律へのネットワークを考える会	200
市民活動助成合計		10 件		1,900

1990年度国際助成の選考を終えて

国際助成選考委員会委員長 石井米雄

◎選考結果の概要

国際助成に関する打診は一年間を通して受けつけているが、選考は7月と9月の2回の選考委員会で行われた。今回の本助成への打診は437件あったが、そのうち国際助成の対象地域(東南アジア)と対象テーマ(固有文化の保存と振興)からみて、選考委員会の審査の対象となった申請は93件で、一方、審査の対象とならないものは344件あった。

そして選考の結果、68件、764,800ドルが採択となった。その国内別内訳は、ビルマ1件、インドネシア16件、ラオス6件、マレーシア3件、ネパール1件、フィリピン16件、スリランカ1件、タイ8件、ヴェトナム16件となっている。

◎選考方法について

国際助成は、選考委員会の審査の対象となる申請についてはすべて財団のスタッフが申請者にインタビューし、補足情報を収集することになっている。

選考委員会では、申請書とスタッフからの報告をもとに、7人の選考委員で選考を行った。これらの委員は東南アジア各国の研究者であると同時に、この助成が対象としているテーマによってカバーされる専門分野(ディシプリン)の専門家である。

審査は、2つの視点、すなわち、当該国の研究状況の中での申請プロジェクトの意義、さらに専門分野の方法論の適切性、から行われる。限られた時間内に多くの申請を効率よく、しかも丁寧に審議することが要求されるが、この点は微妙なバランス感覚が必要である。

◎採択テーマについて

採択されたプロジェクトの扱っているテーマは、「固有文化の保存と振興」の中にすべて含まれるものである。しかし、さ

らに詳しく見ると、いくつかのサブ・テーマに分類することが可能である。採択件数の多い順に分類すると以下のようになる。

「歴史」18件、「伝統文化」12件、「古文書」11件、「言語・辞書」8件、「考古学」5件、「文学」4件。そして、「建築・芸術」、「百科事典」、「近代化と伝統」、「東南アジア地域研究」、「その他」がそれぞれ2件ずつとなっている。「歴史」、「伝統文化」、「古文書」の採択件数の多い点はこれまでの国際助成の傾向と一致する。本年度目立つのは、「考古学」5件のうち4件がタイのプロジェクトである点である。タイでは現在、急速な開発が進む中で、各地で古代の遺物が発見されており、考古学的配慮の重要性が知識人の中で再認識されている。今回のタイへの助成結果は、このような傾向を反映するものとも考えられる。



◎インドネシア若手研究者奨励研究助成について

インドネシアの若手研究者(原則として35歳以下)による個人研究に的を絞ったこのプログラムは、国際助成の枠内に位置づけられるが、別のシステム(公募制)と体制で運営・選考が行われる。

本年度の応募件数は418件で、インドネシア人の学者3人と日本人のインドネシア研究者3人の、合計6人の委員による審査が行われた。その結果31件、67,700ドルが採択された。

本年度の特徴としては、これまで助成の対象とならなかった大学、研究機関、開発援助団体、(合計・10件)からはじめて助成対象者が出たこと、また、これまで助成が行われたことのない2つの地方大学から初めて助成対象者が出たこと、さらに保健所、イスラム学校、NGOなどの現場の人が4人選ばれたことなどがあげられる。

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.54

1990年度 国際助成対象一覧

ビルマ [1件; 24,900ドル]

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (ドル)
1	モン語及びビルマ語古法典の英訳	ナイ・パン・フラ	ビルマ文化省考古学局碑文部 元部長	24,900

インドネシア [16件; 110,400ドル]

2	『聖戦物語』:アチェ戦争(1873年-1912年)における創作と社会の受けとめ方 [継-2]	イムラン T. A.	ガジャマダ大学文学部インドネシア文学科 講師	5,200
3	ワリソゴ, ジャワ島最古の歴史文献に描かれたジャワのイスラム教の祖たち [継-3]	ワシット	ワリソゴ国立イスラム高等学院 研究センター 所長	5,000
4	シェク・ムハマド・アルシャド・アルバンジャリの著作『サビラル・ムフタルディン』の翻字 [継-2]	アナリアンシャ	アンタサリ国立イスラム高等学院 研究所 所長	13,200
5	ムシャワラトウタリピン:南カリマンタンにおける民族覚醒運動時代の地域最大の地方組織 [継-2]	M.ヌール M.	アンタサリ国立イスラム高等学院 研究所 研究員	9,000
6	アチェの慣習法の編纂 [継-3]	ダルウィス A. S.	アチェ慣習法・文化研究所 副所長	16,500
7	地域の復権と発展における文官エリートと軍人エリートの統合の役割—西スマトラのケース, 1966年-1987年 [継-3]	サアフルディン B.	国立防衛大学 教官	2,600
8	サムドラ・パサイの歴史:インドネシアの最初のイスラム王国、1259年-1525年 [継-2]	T. イブラヒム A.	ガジャマダ大学文学部 学部長	1,300
9	言語変化:ランブン、スラウェシ、ティモール、スンバワに移住したバリ人のケース [継-2]	I. G. M. スチャジャ	ウダヤナ大学文学部言語学科 講師	5,500
10	スラカルタのフォルステンランズ・タバコ栽培とブスキのブスキ・タバコ栽培:その地域農業経済と地域社会への影響, 1860年-1960年 [継-3]	スギヤント P.	ガジャマダ大学歴史学科 講師	2,200
11	中部マルク、セラム島のアルネ族の経済関係	エドアルド M.	アンボン・パティムラ大学教育 学部 講師	3,000
12	バンジャル古語の発掘、収集および記録	アブドゥル D. H.	ランブン・マンクラット大学 教育学部 講師	5,000
13	ジャワの村落盗賊:1850年-1942年	スハルトノ	ガジャマダ大学文学部歴史学科 講師	3,500
14	南スラウェシの村落社会の社会・文化変容	イドゥルス A.	ウジュンパندان教育大学社会 科学教育学部 講師	8,400
15	国際会議:シルクロード沿いの港町	A. B. ラビアン	インドネシア科学院	9,000
16	スンダ文化百科事典	アイップ R.	作家	5,000
17	インドネシア若手研究者奨励研究助成の研究成果出版	アスワブ M.	社会経済調査・教育・情報研究 所 所長	16,000

ラオス [6件; 84,300ドル]

18	標準ラオ語辞書の編纂 [継-3]	トンカム O.	社会科学研究所 副所長	22,000
19	カンボジア語-ラオ語辞書の編纂 [継-2]	マハ・カンバン V.	国立社会科学院 副院長	4,400

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.54

No	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (ドル)
20	貝葉文献のインヴェントリー作成 (継-3)	グラ K.	文化省ヴァナシン雑誌 編集長	35,500
21	タン・フン叙事詩に描かれた伝統と儀礼についての研究 (継-2)	ドゥアンドゥエン V.	文化省ヴァナシン雑誌	4,500
22	シンサイ民話の古典詩から現代散文型への翻訳および研究 (継-2)	ウティン B.	文化省ヴァナシン雑誌 副編集長	9,200
23	古代ラオスの碑文研究	トンサ S.	文科省博物館考古学局 局長	8,700
マレーシア (3件; 34,300ドル)				
24	マレーシア史のモノグラフ:1900年-1941年 (継-2)	クー K. K.	マラヤ大学文学部歴史学科 教授	4,200
25	マレーシア軍人エリートの台頭	ナザン・ハロン	マレーシア国立大学歴史学科 講師	12,000
26	マレーシアの8家族:民族とマレーシアの開発がもたらした社会・経済的結果	アジザー・bt・カシム	マラヤ大学文科人類学科 準教授	18,100
ネパール (1件; 17,000ドル)				
27	古典ネパール語辞書編纂 (継-6)	P. B. カンサカール	ネパール語辞書委員会 事務局長	17,000
フィリピン (16件; 188,700ドル)				
28	ブキドノン:1946年-1985年 (継-3)	M. M. ラオ	セントラル・ミンダナオ大学 教授	6,500
29	フィリピン国立公文書館のスペイン語古文書インヴェントリー 作成 (継-4)	R. A. コンセプション	国立公文書館 主任司書	19,900
30	バナハウ山の神話と儀礼:宗教伝説の構造と役割を世界観の指 標としてとらえる研究 (継-3)	G.M. ベシガン	アテネオ・デ・マニラ大学英語 学部 助教授	4,700
31	フィリピンのイスラム芸術と建築:土着と現代	R.N. カニエーダ	フィリピン大学マニラ分校 マニラ研究プログラム 研究員	1,200
32	フィリピン諸語辞書 (継-5)	E. コンスタンティーノ	フィリピン大学社会科学・哲学 学部言語学科 教授	15,500
33	スペイン植民地時代に関する未出版の古文書の調査, 翻字, 訳, 出版 (継-2)	V.B. リキュアナン	フィリピン歴史文化保存ナショ ナル・トラスト 副会長	25,200
34	マラナオ族の叙事詩『グランガン』の出版 (継-4)	M. D. コロネル	ミンダナオ州立大学研究センタ ー 教授	13,600
35	マノボ族の叙事詩『ウラヒーガン』の記録, 翻訳, 編集, 出版 (継-4)	E.G. マキノ	シリマン大学研究センター コーディネーター	21,000
36	フィリピンの各言語による文学のピリピノ語への翻訳・出版 (継-2)	E.M. パチュコ	アテネオ・デ・マニラ大学出版 会 所長	21,800
37	マニラ社会史:1765年-1898年 (継-3)	M. L. T. カマガイ	フィリピン大学社会科学・哲学 学部・歴史学科 助教授	2,600
38	スバネン族の民俗伝承:文化変容の研究 (継-2)	J.V. エンリケス	セイヴィヤー大学古文書館 館員	7,500

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.54

No	研究 題 目	研究 者 名	研究 者 所 属	助成金額 (ドル)
39	18世紀におけるフィリピン聖職者の起源〔継-3〕	L. P. R. サンチャゴ	メディカル・シティ病院 精神医学者	6,400
40	アジアの宮廷音楽の共通要素の探究	J. マセダ	フィリピン大学音楽学部 名誉教授	5,100
41	フィリピンの国家組織発達の社会・政治および文科的側面：1946年-1990年	E. R. サンタ・ロマナ	フィリピン大学アジア研究所 助教授	11,500
42	異文化間交流的視点から見たダバオの3民族グループ〔継-4〕	H. K. グロリア	アテネオ・デ・ダバオ大学社会科学部 教授	14,100
43	フィリピン研究のための固有の資料	J. M. フランシスコ	アテネオ・デ・マニラ大学ロヨラ神学校 助教授	12,100
スリランカ〔1件；10,000ドル〕				
44	アヌラダプラ都城部の考古学プロジェクト：遺物の整理・研究と報告書の作成	S. セネヴィラトネ	ペラデニア大学考古学科学科長	10,000
タイ〔8件；129,700ドル〕				
45	タイの古代織物の研究〔継-2〕	チラボン A.	国立博物館保存部 上級保存科学研究員	7,100
46	バンニャサ・ジャータカの北タイ版の研究〔継-4〕	ピチット A.	チェンマイ大学人文学部 准教授	13,700
47	固有の知識体系の活力と再生への展望〔継-2〕	チャンタナ P.	チュラロンコン大学社会研究所 研究員	17,200
48	タイにおけるホアビン人の研究	スリン P.	シラバコン大学 准教授	29,200
49	北東タイのクメール遺跡の土地利用と文科的変遷	タダ S.	コーンケン大学建築学部 講師	23,800
50	タイ法制史：シャム王国と南部王国の法的システムの比較研究	ピティナイ C.	タマサート大学法学部 助教授	18,400
51	現代クメール語との関連における古代・中世クメール辞書	ウライシー V.	シンパコン大学考古学部 助教授	10,500
52	東南アジアと中国南部の青銅器時代に関する国際会議	チュクナ N.	社会科学協議会・シンラバコン大学	9,800
ヴェトナム〔16件；165,500ドル〕				
53	ヴェトナム百科事典〔継-3〕	P. N. クウォン	ヴェトナム社会科学委員会 委員長	29,100
54	ヴェトナムの漢字およびノム文字による碑文研究〔継-3〕	N. Q. ホン	ヴェトナム社会科学委員会漢字・ノム文字研究所 副所長	9,500
55	ヴェトナムのタイヌン少数民族〔継-3〕	B. V. ダン	ヴェトナム社会科学委員会民族学研究所 所長	6,400
56	チャムの歴史と文化〔継-3〕	N. C. ビン	ヴェトナム社会科学委員会ホーチミン市社会科学研究所	5,300
57	19世紀以降の北ヴェトナム・デルタにおける農業生産組織の伝統的要因が現代に及ぼす影響〔継-2〕	C. V. ラム	ヴェトナム社会科学委員会経済研究所 副所長	7,000

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.54

No	研究 題 目	研究 者 名	研究 者 所 属	助成金額 (ドル)
58	ヴェトナム語の中の中国語を語源とする四千の要素 (継-2)	H. V. ハン	ヴェトナム社会科学委員会言語学研究所 所長	9,100
59	ヴェトナムのフォン・ウオック(村の法律)についての文書の保存と記録 (継-2)	N. D. トン	ヴェトナム社会科学委員会社会科学情報研究所 所長	11,500
60	南ヴェトナムのヴェト族の民族文化 (継-2)	N. Q. ヴィン	ヴェトナム社会科学委員会ホーチミン市社会科学研究所	7,000
61	ヴェトナムにおける仏教の歴史 (継-3)	N. T. トウ	ヴェトナム社会科学委員会哲学研究所 副所長	11,200
62	北ヴェトナムのヴェト族の伝統的祭り (継-2)	N. D. ティン	ヴェトナム社会科学委員会民俗学研究所 副所長	11,600
63	東洋文明とヴェトナムの伝統的家族 (継-2)	N. P. トゥオン	ヴェトナム社会科学委員会社会学研究所 所長	11,400
64	ヴェトナムとタイの社会学者のセミナー: ヴェトナムとタイの伝統と現在	P. X. ナム	ヴェトナム社会科学委員会副委員長	13,400
65	ヴェトナムの仏教寺院	N. D. ディウ	社会科学出版局 局長	9,400
66	15世紀から18世紀のヴェトナム封建制度の法律とその慣行	D. T. ウック	国家と法研究所 所長	9,300
67	村落コミュニティの心理とヴェトナムの文化生活におけるその遺産	D. ロン	ヴェトナム社会科学委員会社会心理学部 部長	9,800
68	北ヴェトナムデルタ地域の商業を主たる生業とする村	P. H. レ	ハノイ大学ヴェトナム研究協力センター 教授	4,500
国際助成小計		68 件		764,800
69 79	インドネシア若手研究者奨励研究助成(対象一覧は省略)	31 件		67,700
国際助成合計		99 件		832,500

1990年度 『隣人をよく知ろう』プログラム助成対象一覧

「翻訳出版促進助成」日本向け (11件; 1,760万円)

No	日 本 語 仮 題 名 (国名)	訳 者 名	出 版 社 名	助成金額 (万円)
1	ビルマ文学史(ビルマ)	大野 徹、堀田桂子、原田正美、池田正隆、ウー・コウンニョン	井村文化事業社	266
2	インドネシアの神髄:文化の旅(インドネシア)	粕谷 俊樹	穂高書店	118
3	忘れられない年月(ヴェトナム)	中野 亜里	穂高書店	84
4	ナソ〜忘れ形見(ネパール)	野津 治仁	穂高書店	134
5	やしの森の女戦士-元南ヴェトナム解放軍指令官グエン・ティ・ディンの伝記-(ヴェトナム)	片山須美子	穂高書店	162
6	ルキア/ウトゥイ 孤独な愛の風景-1950年代のインドネシア文学から-(インドネシア)	松野 明久	現代企画	196

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT No.54

No	日本語仮題名 (国名)	訳者名	出版社名	助成金額 (万円)
7	蛇 (タイ)	桜田 育夫	めこん	158
8	テレグラム (インドネシア)	森山 幹弘	めこん	109
9	早魃 (インドネシア)	柏村 彰夫	めこん	132
10	レンドラ作品集 (インドネシア)	村井 吉敬、三宅 良美	めこん	199
11	曲がりくねった道 (シンガポール)	福永 平和、楊 凱榮	井村文化事業社	202

「翻訳出版促進助成」東南アジア・南アジア向け [12件; 212,000ドル]

No	プロジェクト名	代表者名	代表者所属	助成金額 (ドル)
1	The Sun Also Sets: Lessons in 'Look East'の翻訳と出版	ルスリ B. O.	社会分析研究所 所長	11,000
2	フィリピン向け『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト [継-3]	F. S. ホセ	ソリグリティ財団 専務理事	53,500
3	インドネシア向け『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト [継-4]	M. サストラブラテジャ	カルティ・サラナ財団 副理事長	10,500
4	日本の産業、経済、経営に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版 [継-6]	V. D. ルオック	ヴェトナム社会科学委員会世界経済研究所 所長	36,000
5	日本の伝説、民話、文化史、社会科学の本のヴェトナム語への翻訳と出版 [継-4]	N. D. ディウ	ヴェトナム社会科学委員会社会科学出版局 局長	23,500
6	The Sound of Waves (『潮騒』)の翻訳と出版	F. ラッピ	国立図書センター 所長	4,500
7	『地獄門』、『袈裟と盛遠』、『袈裟と夫』の翻訳と出版 [継-4]	D. A. ラジャカルナ	日本文学翻訳委員会	5,800
8	The River Ki (『紀ノ川』)の翻訳と出版	R. シャー	マシャル財団 事務局長	5,200
9	近代日本短編小説の選集の翻訳と出版	B. チョウドリ	文学翻訳クラブ 会長	6,700
10	『砂漠の恐龍』の翻訳と出版	R. P. ダミジャ	ナングルタ協会 会長代理	24,700
11	『破戒』の翻訳と出版	B. N. タンドン	ギャーンピット財団 専務理事	7,000
12	日本の5冊の絵本の翻訳と出版	M. ダヤル	ナショナル・ブック・トラスト 編集者	23,600

「翻訳出版促進助成」東南アジア・南アジア相互間 [5件; 98,700ドル]

13	Islam's Intellectual Treasury の翻訳と出版	アフマット S. C.	Ikraq 所長	6,800
14	東南アジアの社会・経済発展に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版 [継-3]	N. M. ハン	ヴェトナム社会科学委員会アジア太平洋研究所 所長	27,000
15	東南アジアの歴史、文学、伝統に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版 [継-3]	P. D. ズオン	ヴェトナム社会科学委員会東南アジア研究所 所長	15,000
16	東南アジア相互間『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト (マレーシア) [継-2]	ザリラ S.	学術振興財団 事務局長	39,000
17	南アジア相互間『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト (ネパール) [継-2]	K. M. シャクヤ	文学財団 理事長	10,900

1990年度「隣プロ」翻訳出版促進助成 の運営および選考について

◎プログラムの改革——1990、91年度は 過渡期

本プログラムも14年目を迎え、ここ数年来行ってきたプログラム全般の見直しを基礎として、本年度よりその内容の大幅な改革を行った。改革の骨子は以下の3点である。

(1) 対象地域に、従来の東南アジアに加えて南アジアを含める。(2) 日本向けでは、日本人の専門家からなる委員会を中心に5ヶ年計画を作成し、助成を計画的に進める。(1991年度から)(3) 東南アジア向け等、プログラムが実質的に現地で行われるものは、従来の原則1ヶ国1組織のプロジェクト方式から、原則1冊ごとに申請・審査する個別方式とし、1ヶ国複数組織への助成を行う。

プログラムの連続性との兼ね合いで、1990、91年度は従来の方式と新しい方式が並存することになる。

◎南アジア地域を対象とする活動

1989年度8月頃から、日本の南アジア専門家10名程から個別に南アジアでの展開につき専門的意見をヒアリングし、さらに、11月と1990年2月に非公式の懇談会を行った。後に第56回理事会での承認により、この懇談会は正式に「南アジア委員会」(委員長:辛島昇・東大教授)と改められた。南アジア委員会は本年度中に3回の会合を行い、本年中に、南アジア地域の日本向け5ヶ年計画案を作成する予定である。南アジア地域の日本向

けはこの計画案に基づき、1991年度から開始される。

南アジア向けおよび同相互間については、南アジアで同種の活動経験のある日本の機関また南アジア専門家の意見を聞きつつ、2回の南アジア出張時にインド、バングラデシュ、パキスタンの幾つかの組織を訪問、調査し、助成のための下準備を行った。本年度は、これらの調査した機関のうちから助成を行う方針で望むこととした。

第2回の南アジア委員会において、上記諸組織から出された南アジア向け7件18冊の申請から7件11冊を、南アジア相互間1件6冊の申請はそのまま助成対象候補に選定した。従来、例外として助成を行ってきたネパールとスリランカは、各1件を継続助成の対象として選定した。このうちネパールは、従来のプロジェクト方式である。個別方式では、原則として1冊1冊の翻訳・編集費、著作権料、出版経費の3項目の助成費目のみを助成の対象とするが、プロジェクト方式ではこの3項目に加えてプロジェクトの運営・管理のための費用も助成の対象とする。

◎東南アジア地域を対象とする活動

日本向けは昨年11月から本年2月にかけて、現地側のアドヴァイザーの推薦図書を中心とした助成対象リストをもとに公募を行った。リストに載っている16冊について申請があり、専門委員会において翻訳の質についての評価を行い、この専門委員会の評価に基づき、南アジア委員会と同時に新設された「東南アジア委員会」(委員長:石井米雄・上智大教授)で選考を行って、11件を助成対象候補

に選定した。従来は、専門委員会の評価に基づき国際助成選考委員会で選考を行ってきたが、本プログラムのための新たな委員会の設置により、選考業務はこの東南アジア委員会に移管され、国際助成選考委員会は国際助成の選考に専念することになった。

7月に行われた第1回委員会では、上記の日本向けの選考のほか、東南アジア向け、同相互の選考(以下に説明)および、東南アジア地域の日本向け5ヶ年計画案作成のための予備的検討が行われた。本計画案は、本年中にあと2回行われる委員会において本年中を目途に作成される予定である。

東南アジア向けと同相互間は、主としてプロジェクト方式の継続申請があり、第1回委員会で、東南アジア向け5件25冊の申請から5件15冊、東南アジア相互間4件9冊から4件6冊を選定し、助成対象候補とした。東南アジア地域でも、マレーシアにおいて新しい個別方式を採用し、マレーシアにおけるこれまでのカウンターパートではない2組織に対し、東南アジア向けと同相互間で各1件1冊ずつの助成対象候補を選定した。継続助成の対象は基本的にプロジェクト方式であるが、ヴェトナムは当初から例外的に1ヶ国複数組織・個別方式であり、本年度もこれを踏襲した。

既述のごとく、日本向けプログラムでは従来の公募形式をとらず、委員会を中心とした計画型へ移行する。個別の本の翻訳・出版の希望は事務局で受けつけ、主旨に合うものについては委員会で検討することとなる。

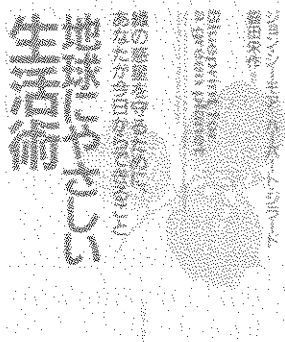
(国際助成部門 牧田・記)

新刊紹介

『地球にやさしい生活術』
 J. シーモア、H. ジラード・著
 鶴田栄作・監訳
 TBSブリタニカ・刊(90.7)
 B5変型判 207頁 1,500円(税込)

近年またぞろ、環境問題が云々されだし、国政レベルや企業、マスコミ等で話題にされる機会が急増している。「このこと自体は好意的に受けとめたいが、お題目に終わらなければいいが…」と考えている向きも多いだろう。環境問題は、国の政策や専門家の研究のみによって解決されるものではない。また、環境破壊を生み出しているのは、きちんとしたアセスメント(影響評価)を踏まえない産業活動や行政のみではなく、実は、被害者だと思いつけている市民一人ひとりの日常生活様態にこそある、ということも忘れてはならないだろう。まず、この点を一人ひとりが認識し、責任に目覚め、その改善のための第一歩をとにかく踏み出すことが今、求められている。「環境問題」というと、何か、われわれ一人ひとりではどうしようもない大きな問題といった感があるが、そうではなく、個人のレベルでも出来ることはたくさんあるということを感じることが必要だろう。

本書は、英国のジョン・シーモアとハーバード・ジラードによって著された『Blueprint for a green planet』を当財団の市民活動助成を得て翻訳され、出版されたものである。「緑の惑星(地球)



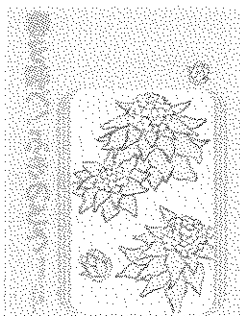
を守るために、あなたが今日からできること」というその趣旨のとおり、日常的な生活の中で、一人ひとりが、その気になりさえすればすぐにでも実践できる方法が分かりやすく描かれている。老若男女を問わず、広く読まれてほしい書である。(G.W.)

『春を呼べ! ふきのとう』
 -ふきのとう文庫15年の歩み-
 ふきのとう文庫・編
 偕成社・刊(90.6)
 A5判 311頁 2,200円(税込)

女性雑誌や育児雑誌などで「布の絵本」や「布のおもちゃ」に関する写真や記事を目にした人も多いだろう。この「布の絵本・布の遊具」作りに関わる日本全国のボランティア活動の先駆けとなり、さらに、これらの活動を通して海外にもその名が知られているグループがある。北海道・札幌市郊外にある「ふきのとう文庫」がそれだ。ここでは、「障害をもつ子どもにも発達があり、文化を享受する権利がある」という信念のもとに、病院内にミニ図書室=文庫をつくる働きかけを行っているとともに、障害児や幼児が楽しむことのできる「布の絵本」を開拓し、その普及活動を行っている。

同文庫がひとつの組織として現在の地で活動を開始したのは1975年のことであるが、その始まりは、更に5年前の1970年、代表者(小林静江)の妹の死に遡る。

本書は前史も含めた「文庫」のこれまでの活動を当財団の市民活動助成を得て記録したものである。ハンディをもつ子どもたちのために本を選定

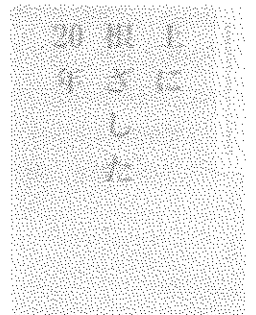


して配布したり、「布の絵本」やその「拡大写本」づくりを行うとともに、国会請願の結果、重度障害者(児)への図書郵送料金を半額にすることに成功したこと、長期入院の子どもたちのための病院内文庫の開設および非障害児との交流の場を目的とした「ふきのとう子ども図書館」の建設など、地道で辛抱強い活動の経過が詳しく綴られている。子どものしあわせを守ろうとする愛と願いがふつふつと伝わってくる心温まる一冊である。(G.W.)

『土に根ざした20年』
 農業開発技術者協会・編
 桂書房・刊(90.7)
 A5判 213頁 1,957円(税込)

「草刈り十字軍」という名前を耳にして、「それは何だろう?」と興味をもった人も多いだろう。これは、毎年夏、富山県下の山林で、全国の学生らが集まって行われる下草刈りの運動である。昭和49年、同県内の山林に対する除草剤の空中散布に反対したメンバーらが、その対案として実践したものであるが、今では、県をも巻き込んだ大きな運動に成長している。この推進母体こそ農業開発技術者協会である。「十字軍」が余りにも有名なため、これだけが協会の活動と錯覚しがちであるが、これは、むしろそれまで行われてきた他の活動から展開したものと考えるべきだろう。

本書は、この協会とそのリーダー・足立原貫(富山県立技術短期大学教授)のまさに「土に根ざした20年」の活動について、当財団の市民活動



助成を得て記録したものである。高度経済成長の中、全国各地の農山村で過疎化現象が目立ち始めていた昭和42年の春、足立原と数人の若者は、社会における“農”の機能を担い続けていくことを目的に、廃村となった富山県上新川郡大山町小原に入り、同協会を結成した。そして、独自の営農活動から始まり、「人と土の大学」、「山崎賞」、「草刈り十字軍」、「中国への農林技術協力事業」など、斬新な発想にもとづくバイタリティ溢れる活動を次々に生み出していった。この種の活動は、ややもすると固定的で閉鎖的なものに陥りがちであるが、読後に不思議な爽快感に包まれ、元気すら沸いてくるのは、やはり、人と土に対する並々ならぬ愛情と執念をもった足立原の個性とロマンに拠るところ大であろう。(G.W.)

『実践グループワーク』

山岡浩一・監修
藤本新二・保田井進・森脇賢司・編著
ミネルヴァ書房・刊(90.9)
A5判 221頁 1,900円(税込)

本書は、副題にも示されているように、「北九州YMCAのびのびキャンプ実行委員会」(代表・山岡



浩一)を実施母体とした障害児とのインテグレーション・キャンプに関する記録を当財団の市民活動助成によってまとめたものである。

全国にある多くのYMCAが、障害児のための様々なプログラムを実施していることや、他の同種の活動に参加していることは知られて久しい。北九州YMCAも当初、他の団体が実施していた「肢

体不自由児療育キャンプ」に参加していたが、その経験と「障害児と非障害児のインテグレーション・キャンプを実施しよう」という代表者の提言を踏まえ、1976年に第1回のキャンプを実施、その後、ほぼ毎年行ってきた。

本書では、1986年までの10年間を一区切りとした内容となっている。インテグレーション・キャンプの課程、アフター・キャンプ、キャンプの生活と安全、リーダー養成とリーダーの役割、グループ・メンバーとカウンセリング、記録と評価などが細かく丁寧に記されており、この種のキャンプ・マニュアル書として、また、グループワークの実践書として、多方面に役立つことだろう。(G.W.)

『クリッパンの老人たち—スウェーデンの高齢者ケア』

外山 義・著
ドメス出版・刊(90.9)
A5判 225頁 3,090円(税込)

あるおばあちゃんの死と葬儀の様をプロローグに始まるこの本は、クリッパンという人口1万6千人のスウェーデンの小さな町を対象に、後期高齢者の多様な生き方とケアの実際を克明に描き出している。長年現地で研究を続けてきた著者ならではの、対話と観察の総集編ともいべき作品である。著者はもともと建築が専門の研究者である。その関心の中心が建築施設にあるのは当然であるが、本書ではむしろ、お年寄り一人ひとりの生き方を見つめ、そのケアの仕組みと密接に関連させながら、施設の多様な体系を語る。専門から図版が豊



富であるが、表情豊かなお年寄りの写真も貴重な情報を与えてくれる。注記も大変丁寧である。日本の後期高齢者対策を血の通ったものとする上で大いに参考になろう。

全体は、I.クリッパンの老人たち、II. 昨日の老人・明日の老人、III. 老人の生活の自立を支えるために、の3部構成。1987年度個人奨励研究助成の対象で、成果発表助成による出版。(Y.Y.)

『リスのきた道—なぜ鎌倉にタイワンリスか?』

小原秀雄・監修、中村千秋・著
大日本図書・刊(90.8)
A5判 185頁 1,250円(税込)

タイワンリスは、その名の示すとおり台湾を中心に生息する。もともと日本にはいなかった。そのタイワンリスが、鎌倉の比較的緑の豊かな住宅地に多数住み着くようになった。なぜか? また、それはいつ頃からなのか?

本書はこのような謎の解明に取り組んだ鎌倉の主婦たちの10年にわたる研究物語で、「大日本ジュニア・ノ



ンフィクション」シリーズの一冊として刊行された。研究のピークは第5回「身近な環境をみつめよう」研究コンクールで奨励研究助成を得て行った聞き取り調査と観察。2,000件に及ぶ聞き取り情報をもとに、その生息地を10年毎に地図上にプロットする。こうしていくつもの侵入ルートが想定され、その生息域の拡大過程が明らかになる。そして住民たちとのさまざまな係わりの実態も。

著者自ら参加した研究だけに、参加者の顔と心がよく見える。著者は現在アフ

リカで象の保護に関する研究を進めているが(当財団の個人奨励研究助成による)、この印税もその研究費に当てられるという。(Y.Y.)

【報告書紹介】
 LOCAL PRODUCTION OF JAPANESE AUTO-MOBILE AND ELECTRONIC FIRMS IN THE UNITED STATES—The “Application” and “Adaptation” of Japanese Style Management

安保哲夫・編

東京大学社会科学研究所・刊(’90.3)

B5判 144頁 (非売品)

編者たちはすでに東洋経済新報社から『日本企業のアメリカ現地生産—自動車・電機・日本的経済の「適用」と「適応」』を出版した(第II種研究の成果。本レポートNo.44参照)。

本報告書は、その内容を英文でリライトし、同研究所の調査報告第23集として刊行したもの。自動車企業、家電メーカーそれぞれ5社に電機部品メーカー1社を対象に、「適用」と「適応」の概念で経営実態を分析している。お問い合わせは直接、東京大学社会科学研究所(〒113 東京都文京区本郷7-3-1)へ。

訃報

当財団の評議員として長年にわたりご指導いただいております大島 彊氏(トヨタ自動車株式会社副会長)は、去る7月24日逝去されました。

氏の多大なるご功績を偲び、ここに心よりご冥福をお祈り申し上げます。

THE ECONOMIC DEVELOPMENT OF VIETNAM IN AN ASIAN PACIFIC PERSPECTIVE

Tran Van Tho・編

日本経済研究センター・刊(’90.5)

B5判 170頁 (非売品)

この3月、ベトナムから5名の研究者が来日し、「ベトナム経済の現状と発展戦略」に関する研究(1989年度第II種研究助成)の一環として日本の研究者たちと2日間にわたるワークショップを開催した。このレポートはそこで報告され論議された内容を、コーディネーターのトラン・バントウ氏が編集し、主催者の日本経済研究センターが、そのReserch Reportの1冊として英文で出版したもので、ベトナムの最近の経済状況が生々しく語られている。お問い合わせは直接、日本経済研究センター(〒103 東京都中央区日本橋茅場町6-1)へ。

公募のお知らせ

当財団では、「新しい人間社会をめざした市民活動に関するプロジェクト」をテーマに、1990年度の市民活動助成・第2期分の公募をこの11月30日まで行っています。これは、市民活動の交流や促進を側面から支援しようというもので、第1期の助成対象は6~7頁に報じた通りです。

応募は財団所定の申請用紙(「プロジェクト用」と「出版用」の2種類ある)で行っていただきますが、申請用紙の入手に当たっては、「計画の概要」を提出していただくなどの手続きがあるため、まず、応募要項の入手が必要です。詳細については、「市民活動助成係」まで。

報告会のお知らせ

当財団では、下記のとおり報告会を予定しております。ご関心おありの方は、研究助成係までご連絡を。場所はいずれも東京・六本木の国際文化会館。

- 1989年度第III種助成研究経過報告会
11月8日(木) 9:30~17:00
- 11月9日(金) 10:00~17:50
- 第5回研究コンクール最終報告会
11月29日(木) 10:30~17:10

Information

♣(財)助成財団資料センター

「1990年度 会員の集い」

- ・テーマ “助成ニーズの把握と対応”
- ・日時 1990年11月21日(水)
14:20~17:20
- ・場所 経団連会館(東京・大手町)
- ・参加費 8,000円(懇親会費を含む)
詳細は同センター(☎03-350-1857)伊藤まで。

編集後記

▶ご覧の通り、今年もまた、たくさんの方の助成対象が決定しました。これで初(1975)年度からの助成累計は、2,646件・72億6,500万円になりました。

▶助成の成果が少しずつでも社会に良いインパクトを与えること。これが、私たち民間助成財団の業務に関わる者のせつなる願いです。

▶そして、こうした助成成果の評価と助成の経験に基づき、フィランソロビーに立脚した真の「社会貢献」のあり方を考えていくのも私たちの責務と心得ます。